NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 10
2005. 1.31

※

・年頭に当たって
・報告ー第1回保存修復見学ツアーー
・保存修復の現場から「こだわりの道具紹介③ーピンセットー」
・世界の修復界は今ーオランダー
・書籍紹介『文化財保存環境学』『バザラにホレた！』
・JCP 事務局通信

年頭に当たって

寒中お見舞い申し上げます。

早いもので、当機構がＮＰＯ　ＪＣＰとして発足した2001年から数えて5年目に突入しました。このニュースレターも今号がちょうど10号になります。

今までの4年間は、理想と現実の狭間にあって暗中模索しつつ、それでも前進を続けてきた年月だったと思います。会員の総数も300に迫ろうとしています。賛助会員が22件というのも嬉しい飛躍です。

いつも考えるのは、我々が本当に世間のニーズに応えているかということです。こうして入会してくださった方々が、我々の組織の何に共感し、何を期待してくれているのか。いつもアンテナを張っている必要があります。押し付けの社会正義ではなく、真に必要とされていることに柔軟に対応していきたい、そのために多くの方々の声を聞かせて頂きたいと思っております。

具体的には、昨年の台風や地震で被災した文化財の救援活動。資金の当てのない未指定文化財の保存修理。地方など情報が不足しがちな個人事業者への情報提供。次世代を担う人材の育成支援……。やるべきことはたくさんあります。しかし資金と人と事業企画の三者が揃わなければ、ことは解決しません。この三者をどのようにマッチングさせ、社会の力としていくか、非営利組織とは言えども経営能力が問われるところです。

現在まで、公的機関や民間の依頼に答える形で活動を続けたり、月例会や講習会の開催により専門以外の方にも文化財の概念を普及させるなど地道な努力を続けてまいりました。今年よりは、より目標に直結し、実効性のある活動を数多く展開していきたいと思っております。

皆様に夢を託していただくだけでなく、夢の実現に向けて、更なるご支援をお願い申し上げます。

特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事長　　三輪　嘉六

※國立臺灣博物館のステンドグラス

報告

NPO文化財保存支援機構

第1回　台湾文化財保存修復見学ツアー

NPO文化財保存支援機構では、今年度初の試みとして海外の文化財保存修復現場見学ツアーを企画し、その第1回目として台湾を選びました。旅行業にはいたって素人の私たち、どうなることかと思いましたが、そこはネットワークに支えられた文化財保存支援機構です。多彩な会員のご協力で、3泊4日の強行スケジュールもなんのその、総勢16名の参加者の評判は上々でした。

台湾を選んだ理由のひとつには、このNPOが発足した当初から、同国と深い親交を育んできた経緯があります。（ニュースレターNo.1「台湾 鹿港龍山寺 彩色保存事業支援プロジェクト」参照）また前号でご紹介した林煥盛さんは台湾からの留学生で、台湾の文化財関係者にたくさんの人脈を持っています。

故宮博物院前でのツアー参加者一同

こうした好条件に支えられ、また賛助会員でもある旅行会社フレンドトラベルの尽力もあって、初めてながら楽しいツアーが組めたことを、関係者の皆様には深く感謝しております。

今回は参加者のひとり、東北芸術工科大学の松田先生に、ツアーの模様を報告して頂きました。

「第一回NPO・JCP台湾文化財保存修復見学ツアーに参加して」

松田　泰典
（東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長）

まだ暑さが残る9月23日、3泊4日の日程で台湾を訪問した。今回の見学ツアーはNPO・JCPが主催する初めての試みであり、三輪嘉六理事長が団長を務めた。三輪先生は、文化財保存修復学会会長でもあり、また来年秋に開館する「国立九州博物館」の館長予定者でもある。ツアー企画としてJCPの大林賢太郎氏（㈱文化財保存）、コーディネーターとして林煥盛氏（もと㈱宇佐美松鶴堂／現東京国立博物館研修生）の2名がスタッフとして加わり、参加者16名は、成田、関空、博多の三箇所から台北へ集合した。

JCPとしては平成13年台中市付近にある「鹿港龍山寺建築彩色保存事業支援プロジェクト」を実施しており、台湾の文化財関係機関との国際的な協力関係が端緒についている。鹿港龍山寺プロジェクトに見るまでもなく、台湾文化財の保存修復をわが国政府が直接的に協力することは困難である。そこには中国を交えた外交的な問題が横たわり、その意味でもNPOやNGOという立場が重要になる。

JCP発足前にも、1999年9月に台湾を襲った大地震に際して、三輪先生はいち早く現地へ入り、文化財の救済活動を支援してきた。その点で、台湾の文化財関係者は三輪先生個人に寄せる感謝の念が強い。この事実は、訪問した各機関での歓待ぶりを見ればすぐわかった。世界最大といわれる中国美術の宝庫「故宮博物院」では院長じきじきに正餐が振舞われ、また台南の「國立文化資産保存研究中心籌備處」においても素晴らしいディナーをごちそうになった。国際的な協力関係を築くには、相互の信頼関係がもっとも重要であることを痛感させられた。

台　北

広大な敷地を誇る國立故宮博物院。

故宮博物院の書画修理室。

故宮博物院院長・石守謙氏（右）三輪嘉六団長（左）。

短い日程の中、植民地時代の建造物やステンドグラ

國立臺灣博物館外観。1915年に日本が建設した。

國立臺灣博物館収蔵庫の様子。

國立臺灣博物館館長・徐水仙女史と。

大龍峒保安宮

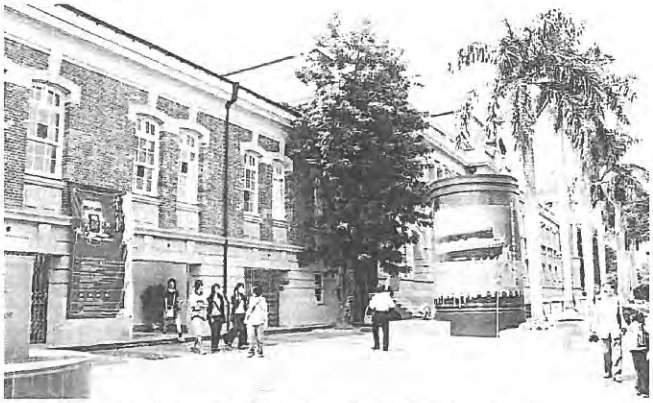
現状を目の当たりにし、すぐに事後策を考えてしまう。さすが、である。

スが美しい「國立臺灣博物館」、大規模な建築工事中で展示室の閉鎖が目立った「故宮博物院」、近年建築修復事業が終わった「大龍峒保安宮」(以上、台北)。今後台湾全土での文化財保存修復活動の中心となる予定の「國立文化資産保存研究中心籌備處」、台湾随一の「孔子廟」(以上、台南)などを駆け足で見学してきた。

故宮博物院では収蔵庫の見学を許された。蒋介石が中国共産党との内戦で敗れ、北京から台北へ文物を運ぶ際に使用した木製のコンテナを実見することができた。また現在も、起こるかもしれない戦争に備え、文物は金属製のコンテナに収納され、持ち運びがすぐできるよう対策がとられているのには驚かされた。

今回の旅で印象に残った点を一つ。台湾国民の日本に対する思いである。日本帝国主義時代に占領した韓

台南



國立文化資産保存研究中心籌備處外観。日本統治時代の建造物。

建物を共有する文学博物館(上の写真では右奥の部分)内部。建物の外層を上手く利用して、活用している。

國立文化資産保存研究中心籌備處主任・楊宣勤氏(左)と。

同所修理室の見学。

台南の消防署。ここも日本統治時代の建物を、そのまま使用している。台湾でも消防署は119番。

国でソウルの総督府が取り壊されたのは記憶に新しいが、台湾では当時の多くの建造物を保存・活用をしている。日本人が造った台南の消防署や警察署、デパートなどの建造物を現在もそのまま使っているのには驚いた。現在日本では少なくなってしまった近代建築を修理しながら大切に活用している姿に感銘を受けた。この事実を知るにつけ韓国および台湾両国の日本に対する感情の大きな差異を感じざるにはいられない。最も日本に近い国、韓国同様に、台湾とも対等な協調関係を築くべきであると思った。

台湾の文化財保存修復活動は端緒について間もないのではないだろうか。今後、JCPとしても協力する局面が増えるに違いない。帰国後、参加者の一人、荒樋久雄氏（上智大学アジア文化研究所）に誘われて参加したODAに関するシンポジウムでも感じたことだが、国際協力は血が通った持続的な活動にまで昇華しないと意味がない。三輪先生がわれわれ若輩者達に示された相互の信頼関係を築くことの重要性をもう一度噛みしめてこそ、協力への第一歩が踏み出せるのであろう。

三輪先生ご夫妻、大林さん、林さんを始めツアー参加者の皆さん、ご苦労様でした。次のツアーはどこに行きますか？　皆さんと旅するのを楽しみにしております。

○松田泰典さんプロフィール

・昭和54年3月	東京農工大学農学部植物防疫学科（農薬化学専攻）卒業
・昭和56年3月	東京芸術大学大学院美術研究科（保存科学専攻）修士課程修了
・昭和58年3月	東京芸術大学大学院美術研究生修了
・平成5年4月	東北芸術工科大学芸術学部芸術学科助教授
・平成11年6月	東北芸術工科大学芸術学部芸術学科教授
・平成13年4月より	東北芸術工科大学 美術史・文化財保存修復学科教授 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長 現在に至る

世界の修復界は今　第6弾　オランダ

「オランダの絵画修復教育事情」

安田　智子（TRCC東京修復保存センター）

海外の修復教育についてのシリーズにオランダの事例紹介を依頼されましたので、私の留学経験を基に書きたいと思います。

私が属していたのはアムステルダムにあるオランダ国立文化財研究所・ICNの附属修復学校です。ICNは3つの部門①Collection②Research & Advise③Trainingから成る研究機関で国内にあるミュージアム、ライブラリー、アーカイブ等の文化的および歴史的施設の収蔵品の管理や保存に関して指導的な立場にありデルタプランで有名です。指導的といってもICN自体は比較的規模は小さくオランダの典型的な3階建て長屋の内装を明るくモダンにリメイクした建物で、海外の研究者との交流が盛んでその活動は国際的でいつも開かれた雰囲気がありました。

修復学校は③Training部門にあたり、**紙・書籍、金属、木彫、ガラス・陶器、テキスタイル**の5コース。4年制で大学ではないため入学試験は2年に1度、私の同級生は紙コース3人、金属3人、木彫5人、ガラス・陶器が3人、テキスタイルは0人と少数制でした。年齢幅は18歳から30歳後半で、外国人は私以外にドイツ人が1人いました（男女比はほぼ半分）。

授業構成は理論と実習が同時進行です。1年生から基礎知識として修復概論、美術史考察、保存科学、素材学などの講義を受け、並行して作品の修復、科学的分析、プレゼンテーションなどの実技訓練があります。最終年度はインターン年で、希望に応じて国内や海外のミュージアムなどで現場研修を受けます。同級生は「私は大英博物館で研修したい」などと言っており、贅沢な機会が学生に与えられるヨーロッパの、恵まれた教育環境に感心しました。

教育プログラムの最大の特長は、同じ建物にあるICNの他部門の保存科学者、研究者らによる直接指導を受けられる点にあるでしょう。これらの専門家のサポートを受け、作品の技法や時代背景の英・独・仏語他での広域な文献検索、あるいは最新の分析機器を用いて科学的な調査研究などの訓練が行われます。2年生では専攻の異なる学生が混成チームとなり、実際の作品や収蔵庫に起こりうる課題に取り組み、プレゼンテーションを行って他の分野への理解も深めていました。実技は作品の製作経験も行い、修復の訓練にはICNの責任で本物の作品が教材として提供され、教官の指導の下、学生が撮影や記録など含めた修復作業を行いました。当然修復報告書もしっかり作成するので教育効果はおのずと高まります。

私が気に入っていた授業は、現役コンサバターと一緒に受ける授業です。隔週で平日の午前中の授業にすでにミュージアムやアーカイブで働いている修復家が4～5名出席していました。彼らの修行時代には学ばなかった紙の化学的劣化や保存環境といった紙の劣化に関する化学の講義が短期コースとして提供されていました。ベテランたちは真剣そのもの。日常業務で感じている疑問をドンドン教官に投げかけます。そしてその質問こそ学生にはとても刺激になり実際の現場での問題を実感できたものです。先輩修復家は「このクラスで最新の修復材料や化学薬品の知識が理解でき古い世代にとってはありがたい。仲間に会えるのもいいね。いつも午後職場に戻ったらみんなに話しているよ」と言っていました。現場で必要な知識は学生時代には学べないことも多いため、現役にも学生にとってもよい教育システムだと感じました。日本でも修復に携わっている人に役に立つ短期などでの通い易いコースが実現できないものかと思います。

ICNの修復学校は学生にとって寛容な教育環境でした。例えば、担任の先生からは「不満やわからないことがあれば言うこと。我慢していたらわからないねぇ。学生がやりたいことに協力するのが先生の役目だから」とよく言われました。私が外国人で特別かと思っていたら、同級生が「私はこの課題ではなく違うことがしたい」「これが面白いから引き続き研究したい」と言っている姿を見ました。先生は「もう少し続けてみては？」

「じゃあ変更も考えよう」「では、君だけこれを深めてみるか、図書館で文献を読むのも忘れずに」などと助言しており、短い教育期間で有効な指導、訓練が与えられていたように思えました(これは修復教育というよりオランダの教育の特徴なのかもしれませんが)。

私自身の例では、当時の保存科学部長Judith H. Hofenk de Graaffから「素晴らしい和紙の国日本からはるばる何しに来たの？」と問われ、日本やアジアのインク焼け文書や酸性紙資料の劣化について話すと「それは大事だ。欧米では洋紙の研究が先行しているからアジアなど熱帯地域の資料の劣化にはまだまだ課題があるね。貴方のやりたいことを遠慮せず何でもやりなさい」と応援されました。ちょうど在学中、ICNはインク焼けのワークショップの開催、大量脱酸の研究結果が公表され国立公文書館や王立図書館での採用、稼動が行われていた時期でしたので、いろいろと勉強する機会を持つことができました。

また保存科学者らが専門知識や技術的なこと以外に「先進国の役割」に触れていたのが印象的です。つまり新しい素材や技術が生まれる中、保存科学は様々な問題を長期的に考慮して新しい技術を積極的に取り入れたり、一方で作品へのリスクを回避するあるいは最小限にするために基準や規制を設けたり、警告を発したりする役割があるという意味です。私の理解では彼らは<問題解決型志向>で修復現場を支えてくれる存在で教育を受けている間とても頼もしく思えました。

25周年目にあたる2003年に修復学校がICNの予算削減の対象となり一時その存続が危ぶまれましたが、教育部門は閉鎖の危機を免れて現在も継続しているとのことで元在籍者としては嬉しい限りです。

(詳しいことはwww. icn. nlを参照ください)

注：ICNはInstituut Collectie Nederlandの略。オランダ教育文化科学省の所轄で旧Central Research Laboratory。

○安田智子さんプロフィール
- 兵庫県出身
- 大阪外国語大学外国語学部イタリア語学科卒業
- 日建設計株式会社勤務
- 東北芸術工科大学芸術学科文化財保存科学コース卒業
- オランダ国立文化財研究所ICN 附属修復学校・紙書籍コース修了
- オランダ国立公文書館、ロッテルダム海洋博物館・修復部にてインターン
- 現在、TRCC東京修復保存センターに勤務

保存修復の現場から

「こだわりの道具紹介③ーピンセットー」

(レポーター：八木三香)

コレクションのほんの一部

世の中にはコレクション好きの人間が少なからずいる。特に男性にその傾向が強い……ように思うのは偏見だろうか？　ひところ流行ったチョコエッグフィギュア、鉄道グッズ、プラモデル、コイン、切手……挙げれば限りがないけれど、ピンセットというのは珍しいのでは？
え？　技術者だったらあたりまえ？？

今回の取材は、こだわりの薄い生活をしている筆者には驚きの連続でした。一口にピンセットと言ってもこんなにあるんですねえ。

紹介してくださるのは、関西在住の某紙資料修復技術者、匿名希望なのでA氏としておきましょう。紙資料の修復に従事して20年以上のベテランです。では、まずそのコレクションから。

右図は材質による違いです。

上から
①プラスチック、②③グラスファイバー製、④りん青銅、
⑤チタン、⑥クロム、 ⑦ニッケル、⑧アルミ、
⑨セラミック

素材で選ぶポイントは？

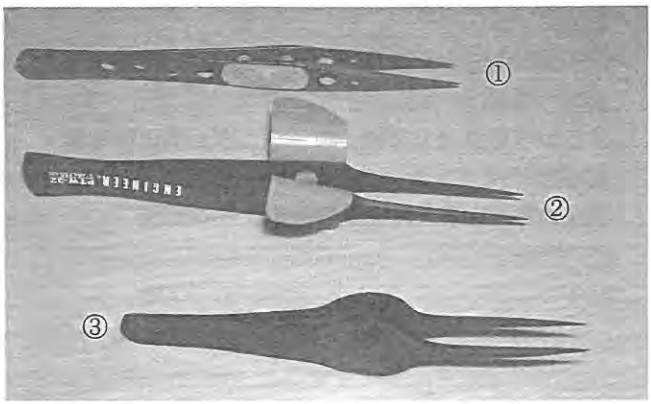
「第一に、水を使う職業なので、ステンレスなど錆びにくい合金が望ましいですね。また、店に行くと「非磁性」という表示があります。これは磁気が起こらないような合金を使用したり、フッ素加工したりしてあるものです。金箔などの金属を扱う場合は気にする必要があります。日本には金箔用に竹でできた竹ばさみがありますが、竹を素材としたピンセットも作られています」

次は変わりダネシリーズ。

① はステンレスにフッ素加工したもの。穴が開いているのは軽量化するため。中央のゴムは滑り止め。

② 持ったとき指から落ちないようなストッパー付き。ちょっと考えすぎ？使いにくい。

③ 真ん中が丸い形が愛らしい。でも特別使い易いということはない。



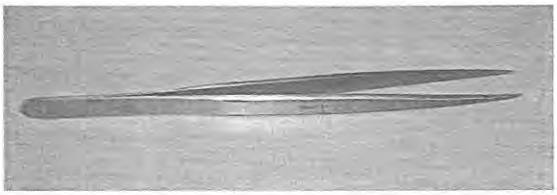
中でどれが一番お気に入りなのですか？　そしてその理由は？

A氏がお勧めするのは、次の3本。

①スイス　デュモン社。SSタイプ。イノックス（INOX＝ステンレスのこと）製。SSタイプというのは、写真にあるように最もオーソドックスな形のピンセット。汎用性があり、普通はこれ1本あれば十分。デュモン社の製品はステンレスながら非常に軽く、先端の噛み合せが抜群で、無駄な力無しで扱うことができ、薄い紙でも取り落とすことがないそう。

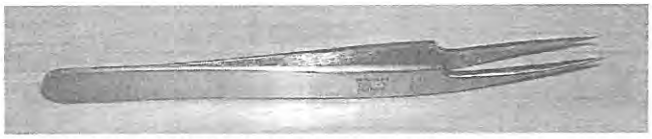
①デュモン社（スイス）SSタイプ　素材：イノックス

②スイス　フォンタックス社のSSタイプ。チタン製で圧倒的に軽いが、先端がデュモン社製と比べると多少鈍い。

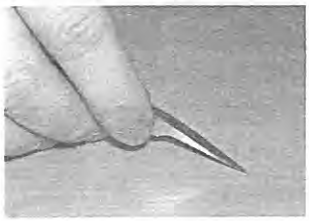


②フォンタックス社（スイス）SSタイプ　素材：チタン

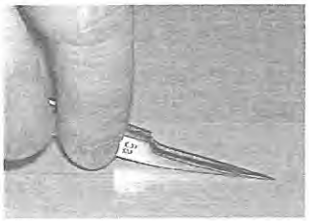
③そして最もA氏が愛用するのが、デュモン社　5aタイプ。デュモクセル（合金の1種）製。鷹の爪のようなカーブがつけられていて、点での作業時上からつまむに良し。※1逆にするとストレート部分を使って線状にものを扱える。※2



デュモン社（スイス）5aタイプ　デュモクセル製



※1　点の作業



※2　線の作業

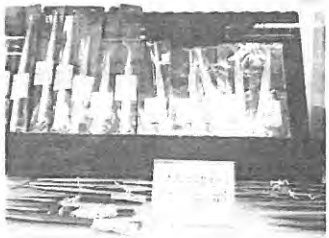
軽さを目的にするなら、チタン製が一番軽い。他にもボディを極力薄くしたり穴を開けたりという工夫がされていますが、多少重くなってもボディに厚みがある方が、しっかり対象をつかめるとの事です。

で、気になるお値段は？

「一般的にホームセンターなどで売られている国産のものは、数百円台からあります。それなり工夫が凝らしてあって、種類も豊富です。フッ素コートをしてあるものなら3,500円～5,000円ぐらい。特殊金属だと5,000円～15,000円ぐらいでしょうか」

お気に入りのスイス　デュモン社製はどこで買えるのでしょうか？

「東急ハンズでも東京なら新宿店、関西なら心斎橋店が種類を豊富に揃えています。文具の伊東屋、あるいは東京秋葉原の工具屋さんなども利用しています。画材屋で取り寄せてもらったり、輸入工具専門店でも買っています」



東急ハンズにて

それ以外にも社寺で行われる蚤の市などをマメにのぞき、珍しい道具を見つけるとつい買ってしまうとのこと。全て仕事に使うためではないらしいのですが、そんな遊び心が使いやすい道具に出会う最良の方法なのかもしれません。

今日はお忙しいところ、ありがとうございました。

書籍紹介

『文化財保存環境学』

三浦定俊・佐野千絵・木川りか　著　朝倉書店発行
2003年11月20日発行・定価：3,600円＋税　200頁　A５判

今、「環境」が流行っている。近年、環境汚染や地球温暖化などの地球環境問題がクローズアップされ、私たちの日常でも何かしらの「エコロジー」の影響は受けていると感じる。そして文化財の分野でも「保存環境」が注目されている。「preventive conservation―予防的保存」が言われている。現在世界的な保存の考え方は、まずは資料をとりまく環境を整備する事に重心が置かれるようになってきた。著者の一人である三浦氏は、本書で「preventive conservation」を「予防的保存」という直訳ではなく、「保存環境作り」の方が分かりやすく、意味としても適切ではないかとしている。そして、今の文化財保存の先端である「保存環境作り」についてまとめた本である。

本書は、1.温度、2.湿度、3.光、4.空気汚染、5.生物、6.衝撃と振動、7.火災、8.地震、9.盗難・人的破壊、10.文化財公開施設に関する法規の10章から構成されている。保存環境を劣化要因ごとに分類して解説している。各章の項目は普段使っている用語だと思うが、それらについてしっかり説明できるかとなると、不安を感じる。

著者の大学での講義がもとに構成されている。そのため、基礎的な化学から始まり、劣化の原因・状況、回避の説明、検査方法、計測機器・器具・材料などの説明などが載っている。

本書について、三浦氏は「単なる解説書ではなく、なぜそうなるのか、なぜそのような対策をとるのか、読者が基本に立ちもどって考えられるような教科書にしたいと考えて書いたつもりである」といっている。保存環境で作品の種類別による劣化の違いや、器具などの種類などが例を挙げながら解説されている。

実際、読んでいくと、中学高校時代の化学物理の授業が甦ってくるような懐かしい感じがした。化学記号や方程式、グラフに表と……。当時この方程式やったなあ。その当時習った状況だけが浮かんだ。方程式への理解については別にして、実例が出てくるとなるほどと感じ、読み進んでいった。

科学と聞いただけでフリーズを起こしそうな方にとって読みやすいとは言い難いが、ただ知っておく必要はあることは確かだと思う。経験で状況を判断して行っている事が、理論上でも理解できると、これほど力強い事はないのだろうなと感じる。なかなかそうはいかないが……。

博物館、美術館の施設の環境管理を想定した本ではあるが、大事な作品を持っている方や預かっている方についても参考になると思う。

そして、作品にやさしい環境作りを目指そう。

（三浦功美子）

※上記書籍を期間限定にて１割引きで購入できます。（送料は出版社負担）
購入御希望の方は３月末日までに、ファックスまたはメールにて当会事務局までお申し込み下さい。
（ＮＰＯ　ＪＣＰ事務局　FAX:03-5363-4533　E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

『バザラにホレた！』新薬師寺・十二神将彩色再現ものがたり

松澤尚美・山田修　著　株式会社キャドセンター発行
2004年10月15日発行・定価：税込1,000円　137頁　A５判

現代のピカピカのクリエーターたちが挑んだ、薬師十二神将の彩色再現ものがたりである。発行したキャドセンターは、三次元映像を得意とするIT企業である。今流行のCGを駆使して、マンションの完成予想図から江戸時代の吉原の再現まで行って見せる。レーザースキャナという三次元の形状を取得する装置を使用して、様々な文化財をデジタル化。文化財のデジタルアーカイブも同社が力を入れる事業のひとつである。

そんなスキルを持った彼らが新薬師寺の十二神将彩色の再現に取り組み、DVDを制作した。この本はその記録である。著者の松澤さんは映像クリエーター。山田さんは文化財のCGを制作する技術者。「バザラ（十二神将のひとつ・伐折羅大将像）と踊りたい！」とホレこんだ松澤さんが山田さんを動かし、ついには彩色の再現まで。 著述はふたりの掛け合いで進んでいくが、様々な困難の中、ふたりの情熱が回りを動かしていく様子がとても清清しい。再現されたバザラの彩色には様々な評価があるだろうが、ひとつの文化財が人を動かし、現代の創造の源になりえることが生き生きと伝わってくる。「文化財」というと教科書の中の言葉といったイメージが付きまとうが、この本は全く別の側面を見せて新鮮だった。著者が言うごとく「ブンカザイって何？」という人にこそ読んでもらいたい。

タレントのはなさんがナレーションを務めるDVDでは、彩色再現のプロセスがまざまざと実見できるが、本も前小口の真ん中にパラパラ漫画がついていて、プチ動画を楽しめる。この人たちにしてこのアナログが嬉しい。

DVD（￥3,360）とセットならいくらかお安くできるかも･･･とのキャドセンターのお言葉。欲しい方は、とりあえずJCPまでご一報を。（M.Y.）

※キャドセンターのURL：http://www.cadcenter.co.jp

ＪＣＰからのお知らせ

関連団体イベント案内

厳島神社国宝展

□会期：2005年3月25日（金）～5月8日
□会場：東京藝術大学大学美術館
（東京都台東区上野公園12-8）
□問い合わせ　ハローダイヤル：03-5777-8600
□観覧料金：一般1,200円（前売り1,000円/20人以上900円）
高校・大学生；800円（600円/500円）中学生以下：無料
□内容：2004年9月の台風18号により被災した厳島神社は、国宝、重要文化財計40棟のうち国宝・左楽房が倒壊するなど被害は30棟に及びます。復旧には約7億9000万円が必要とされ、修復作業は２年近くかかる見通しです。
この展覧会は、復興支援のため緊急企画されました。展覧会の収入は、厳島神社復興支援の一助となります。

香川県被災文化財救援基金　経過報告

去年から開設した「香川県被災文化財救援基金」には、おかげさまにて予想以上のご寄付が寄せられています。
暖かいご支援をどうもありがとうございました。ここに寄付者名を記し、感謝申し上げますと共に、現在の寄付金使用状況をご報告させて頂きます。

現在の募金額：231,000円（115.5口×¥2,000）
ご寄付くださった方のお名前：新井榛名様／安藤智之様／石山表具店・石山達也様／今西寿光様／㈱宇佐美松鶴堂　宇佐美直秀様／大蔵綾子様／大林哲夫様／長田寛康様／香川県歴史博物館有志様／㈱コスモインターナショナル岡田泰吉様／加藤章男様／㈱光影堂様／(有)坂田墨珠堂様／佐藤隆明様／嶋根隆一様／瀬戸口啓様／竹内進一様、朋世様／竹ノ下磨須子様／塚尾富子様／難波田英子様／西田昌永様／根本則男様／半田達二様／半田正博様／百元節様／平井茂子様／増澤文武様／松本洋子様／三浦定俊様／(有)武蔵野文化財修復研究所様／矢野俊昭様／村上直子様／村山隆雄様／八木三香様／渡部明夫様／渡辺務様（アイウエオ順）
支出：調査旅費１名（１月９日　京都→観音寺市）¥20,600
調査旅費（'04年９月大林理事／堀田圭吾会員）¥23,800
活動記録：2005年１月９日　尾立和則運営会員が今後の作業方針を探るため現地調査。観音寺市担当者と打ち合わせ。次回は２月20、21日現地入りの予定。

文化財保存支援機構では、引き続き募金活動を行います。
振込み口座は以下の通りです。
振替用紙ご希望の方は事務局までご請求ください。
追ってお送りさせて頂きます。
郵便振替
口座名：ＪＣＰ 香川県被災文化財救援基金
口座番号：00160-0-371553

ご入会ありがとうございました。

（平成17年１月31日現在入会者数）

□理事　6名　□運営会員　14名
□登録会員　142名　□一般会員　114名
□賛助会員　22件

(株) 宇佐美松鶴堂
(株) 岡墨光堂
(株) 和蘭画房
桂文化財保存修理工房
(財) 元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学
歴史遺産研究センター
(株) 光影堂
コンテンツ株式会社
(有)坂田墨珠堂
(株) 修美
宗教法人　正法院
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品事業部
(株) 半田九清堂
百元　節
フレンドトラベル
(株) 文化財保存
(有) 文化財修復技術研究所
溝川商店
他個人３名
（アイウエオ順・敬称略）

NPO JCP の活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で，文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org
※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。
・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP
・UFJ銀行　四ツ谷支店　普通預金　3960340

NPO　JCP　NEWS
第10号
2005年１月31日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒160-0008
新宿区三栄町６番地　小椋ビル403号
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
増澤 文武
白井 久明
伊原 惠司
谷　久光（事務局長兼任）
〈編集協力〉　嶋根 隆一
〈事務局〉　谷 久光（事務局長）・八木 三香（総務部長）
松本 洋子・三浦功美子